

糖尿病と皮膚免疫

糖尿病では、皮膚の合併症として感染症やかゆみを生じやすいことも特徴です。皮膚の感染症で皮膚科を受診され、糖尿病が発見されることもよくあります。糖尿病では血流が悪くなり、末梢神経障害のため皮膚病変を生じても気付くのが遅れがちです。しかも、重症化しやすいため注意が必要です。今回は、糖尿病の皮膚免疫異常についてお答えします。

質問：免疫に関係する細胞は？

回答：T細胞、B細胞、好酸球、肥満細胞、好中球などがあります。皮膚ではT細胞に情報を伝えるランゲルハンス細胞も存在します。皮膚のランゲルハンス細胞は、インスリンを分泌する膵臓のランゲルハンス島におけるβ細胞とは別の細胞ですが、ランゲルハンス島と皮膚のランゲルハンス細胞の発見者はともにドイツの医学者であるポール・ランゲルハンスです。彼は群を抜いた成績のため医学部の卒業試験を免除されたエピソードの持ち主です。私も皮膚のランゲルハンス細胞については長年にわたり研究してまいりましたので、皮膚免疫は当院の得意分野の一つです。

質問：なぜ感染症を生じやすいの？

回答：糖尿病でコントロール不良の状態が続きますと動脈硬化が著明となり感染病巣のある皮膚に感染防御機能を担うT細胞やB細胞が到達しにくくなります。更に高血糖状態は細菌に攻撃的に作用する好中球の機能も低下させてしまいます。同時に、治療薬としての抗菌剤も血流が悪いために皮膚病巣部で十分な濃度に達しない可能性があります。これらの理由で糖尿病では感染症を生じやすくしかも重症化しやすいと考えられます。

質問：なぜ、かゆくなりやすいの？

回答：糖尿病では、痛みは感じにくいのに、かゆくなりやすいというかゆみ過敏の状態にあります。糖尿病のかゆみはアトピー性皮膚炎のようなアレルギーでみられる好酸球が増えて生じる病態とは異なりますが、かゆみ過敏のため引っ掻いて二次的に湿疹化することが多くみられます。湿疹化してしまいますと肥満細胞からかゆみを起こすヒスタミンなども分泌され、ますますかゆみが強くなってしまいます。

質問：対策は？

回答：早期発見、早期治療が大切です。糖尿病の方で皮膚に異常を感じたら皮膚科でご相談ください。糖尿病と免疫については平成22年度の糖尿病教室でもとりあげていますので受講されることをおすすめします。

文責(森田秀樹)